実行団体 事後評価報告書	特定非営利活動法人　トルシーダ	活動地域	愛知県　豊田市

つながりで作る
多文化多様性が輝く地域プロジェクト

E-mail　torcidajpjp@yahoo.co.jp
URL　http://torcida.jimdo.com/

資金分配団体名　　一般財団法人 中部圏地域創造ファンド
資金分配団体事業名　NPO による協働・連携構築事業
事業の種類 草の根支援事業 2019
実施期間　2020 年 4 月～2023 年 3 月

1 事業概要

社会課題	豊田市にある保見団地は、日本人の高齢化と外国人の集住が特徴的な団地である。日本人住民は外国人の集住を負担に感じ、外国人住民との交流は希薄である。そこでは、①地域の担い手がいない②どこに誰が住んでいるのか分からず、孤立化が懸念される。③日本語を学ぶ必要がない④子どもは日本語の力もポルトガル語の力も伸びない。といった課題がある
事業概要 対象者	保見団地の約 3,800 人の外国人住民を主な対象に、①一得意なことがあり活躍できる外国人の人材発掘②アートプロジェクトでの日本人との交流③子育てサロン④助け合いのためのフードパントリーを実施する
中長期 目標	事業実施を通して目指す姿は、顔の見える関係づくりが進み、日本人住民と外国人住民がお互いにあいさつが交わせるようになること。外国人住民の主体的な活動が生まれること
活動方針	外国人住民の意識を知り、地域に主体的に関わる人材を発掘し、日本人住民と対等な対話の場の創出を目指す。フードパントリー、子育てサロン等を実施し、子育てサロンが外国人による主体的な活動になることを目指す

地球家族でアートワークショップ

アートプロジェクトについて市長と意見交換

3 年間の活動の成果	
コミュニティ活性化のための活動を行う外国人が見える化し、地域で活躍することにつながった	**活動を行う外国人 21 人**
保見アートプロジェクトが定着し、日本人住民と外国人住民との日常的な交流がすすんだ	**アートプロジェクトと関連する事業の実施　19 回**
子育てサロンでやりたいことが実現できる体験を積み、子ども会に代わる組織の萌芽が表れた。	**グループができ活動**
生活上の困りごとの対応に向けて、協力してくれる人や団体があり、困りごとが把握できる状態にある ① 卵、野菜、米等の食材、日常品の寄付等物資の協力者数 ② 相談をつなげた先　食材寄付の機関 ③ 毎週のフードパントリーに来た人数 ④ 日本教室や相談会で生活相談や食料支援の相談を受けた人数	**① 10 名** **② 10 機関** **③ 開催数年 70 回で延べ 4500 人。** **④120 人**

2 事後計画の記載内容

2 －1 主な活動とアウトプット　※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

活動 1

・外国人コア人材に対してインタビュー調査を行う。（中京大が実施する調査に対象先紹介等の協力、場合によって同行等／年間 80 人）
・外国人コア人材を講師に迎えたセミナーやワークショップを開催する。（中京大と協働）
・保見人材データーを作成する。

アウトプット	チームを構成する団体が、外国人住民の人材情報と、コミュニティの現状把握を共有する。		
指標　1	①インタビューによって発掘した外国人人材情報　②チーム会議の回数		
	初期値	目標値	実績
	初期値）①無　②無	目標値）①80 人 ②１回／月	①　20 人 ②　1 回/月

活動 2

・保見アートプロジェクトを振り返るセミナーを開催する。
・保見アートプロジェクトの成果を継承するためのワークショップを開催する。

アウトプット	アートプロジェクトを通して日本人住民と外国人住民とが交流する。 注：初期値は、アートプロジェクトを開始した特別な年だったため目標値より高い。		
指標　2	①参加人数　②実施回数　5 回／年		
	初期値	目標値	実績
	①300 名　（参加延べ人数） ③　11 回／年	①　200 名（参加延べ人数） ②　②5 回／年	①　200 名（参加延べ人数 ②　5 回／年

活動 3

・子育てサロンのニーズを検討し、実施する。
・子ども食堂、子育てサロンの参加者、関係者にインタビュー調査を行う。保見プロジェクトが行う子ども食堂、住民調査の後方支援、および食材配布活動（フードパントリー）を通して、住民とのつながり活動を行う。
・子ども会にかわる組織について検討会議を実施し、組織化を進める。
・子ども会にかわる組織が主催となりアートプロジェクトできれいになった場所を活用した「子ども縁日」及び、「子育てサロン」や「卒業を祝う会」「入学を祝う会」を実施する。

アウトプット	子育てサロンに団地の日本人住民と外国人住民が参加する。		
指標　3	①参加人数　②支援者の人数　③実施回数		
	初期値	目標値	実績
	①無　②無　③無	①20 人 ②30 人 ③３回／年	子育てサロン ①　20 人～30 人／1 回 ②　5 人～20 人／1 回 ③　5 回／年

活動４

・フードパントリー（主に卵の配布）を実施して日常的にあいさつができる関係をつくる
・フードパントリーに持ち込まれる簡単な通訳や翻訳を行う

アウトプット	困ったことが相談できる助け合いの雰囲気が醸成される		
指標　3	①参加人数　②支援者の人数　③実施回数		
	初期値	目標値	実績
	①　無　②無　③無	①　40 人 ②　15 人 ③　53 回／年	①　30 人～60 人 ②　30 人 ③　53 回／年

２－２　３年間のインプット

	計画値		実績値	
資金	事業費　（自己資金含む）		事業費　（自己資金含む）	
	直接事業費 管理的経費	5,137,400 円 103,600 円	直接事業費 管理的経費	4,685,000 円 414,400 円
	評価関連経費	234,000 円	評価関連経費	
人材	内部：合計５人（担当者２人、補助３人） 外部：合計６人（専門家１人、アーティスト５人）		内部：合計５人（担当者１人、補助者４人） 外部：合計７人（アーティスト６人、まちづくり１名）	
資機材・その他			エアコン、調理器具、卵パック、台車	

１）資金インプットの特徴、主要な支出項目

事業計画に従い支出すると共に、備品購入の際には資金分配団体に購入可能かどうかを確認する等適切な管理を行った。主な支出項目は

〇人件費/謝金：コーディネーター、食材支援スタッフ、子育てサロン託児、通訳翻訳、外部講師（アーティスト、ダンス、ネイル、写真）

〇物品費：アート材料、塗料、子育てイベント材料、調理食材、食材支援用食材、WIFI、食材倉庫家賃（50%）

２）自己資金の種類、資金調達で工夫した点

フードパントリー、子ども食堂で予算のない部分（食材の購入、通訳の人件費）について自己資金を充てた。自己資金は団体の年会費、寄付金である。

「資金」ではないが前原農園からの毎週の卵の寄付（10 個×６４世帯分１年分 123 万円相当）、まことファームや地域住民、ボランティアの方々からの野菜や果物の寄付は活動の大きな支えとなった。

また、別事業（ハウジング＆コミュニティ財団）の助成金で制作した移動公民館を本事業の中で活用した。

３）人材インプットの役割分担等

事業のコーディネーター及び参加者。

〇コーディネーターの役割：子育て支援活動の人材育成及び、アートプロジェクトの実施のための調整。

フードパントリー実施のための人材育成と外部との連携、将来ビジョン作成のためのワークショップのコーディネート、コーディネイト会議、チーム会議、関係者会議等への参加で、円滑な事業を進めた。

〇参加者の役割：イベントのための準備、寄付物資の受け取りや管理、支援を必要とする人との橋渡しを行った。事業全体としてはチームごとに担当事業があったが、毎週金曜日の卵配布を中京大の協力も得て行うことができた。

3 事後評価の方針

3-1　評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野
内部	伊東　浄江	トルシーダ	全般
内部	山口　ジェシカ	トルシーダ	ブラジル人の立場、また通訳として
内部	高岡　カレン	トルシーダ	卵配布、準備、受付
内部	星島　タカシ	トルシーダ	卵配布、準備、受付
外部	近藤イゴール	県営住民	子育て、住民としての声
外部	タシマミカ	県営住民	子育て、住民としての声

3-2　事後評価のポイント

1	コミュニティ活性化のための活動を行う外国人が見える化され、地域とつながる状態をつくることができたか
2	アート活動を通して日本人・外国人住民が日常的に交流する状況に近づくことができたか
3	団地住民と外国人住民が子育て活動を接点として、つながりあう関係を作ることができたか。子ども会に代わる組織の萌芽が表れたか
4	フードパントリーの活動を通して団地住民の生活上の困りごとの把握や見守り関係を作ることができたか

子育てサロン「したいこと」ワークショップ

子育てサロン七夕×フェスタジェニーナ

4 事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

※アウトカムの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

4-1　コミュニティ活性化のための活動を行う外国人が見える化され、地域とつながる状態をつくることができたか。

<table>
<tr><td>成果</td><td colspan="3">人材の見える可のためのリスト作成　発掘した人材が子育てサロンでの講座の講師を務めたり地域の祭りに出店するという活躍する場を作ることができた</td></tr>
<tr><td rowspan="3">アウトカム指標　1</td><td colspan="3">サッカーコーチ、ポルトガル語教師、YouTuber、コミュニティ通訳などコアとなる人材とのつながり</td></tr>
<tr><td>初期値</td><td>目標値</td><td>実績</td></tr>
<tr><td>人材はいるが地域とはつながっておらず見えない状態</td><td>保見団地人材活用マップができて見える状態になっている。
２０名</td><td>人材データを作成し、ニーズに応じて依頼できる関係性ができた 21 名</td></tr>
<tr><td>評価方法</td><td colspan="3">自治区役員・講師を務めた人・通訳者・多文化の歴史が語れる人等へのインタビュー</td></tr>
</table>

1）確認できた事実・成果

●通訳・小物作成・料理など多彩なできることを把握した人材を把握

コロナ感染拡大の懸念から、家庭訪問してのインタビューは控えたが、日本語教室や、ブラジル人学校訪問時、卵の配布時にインタビューを行った。「得意なことを活かして何かしたい人、できる人を探している」と伝えると知人を紹介してくれた人もいた。多くの作品をアルバムにして教室を開きたいと語る人もいたし、ブラジル料理やお菓子が得意という人たちのケータリングはプロ並みであった。人材活用ＭＡＰを作成し、21 名のリストができた。（ｐ６に掲載）。

●インタビューを介して地域の祭りでの活躍につながった

団地内で、日本人とは異なる感性を生かした装飾品等を作り販売している住民がいることを耳にはしていたが、直接会って話を聞き、作品等を見せてもらうことができた。インタビューだけではなく、子育てサロンの講師や祭りの出店等の依頼をすることができた。

10 月 23 日の地域の祭り「ふれあい祭り」で、外国人住民がブラジルのスナックや手づくり品を販売することにつながった。

2023 年 1 月には中日新聞社からの知事選について話ができる人材がいないかとの問い合わせにはデータにある人材を紹介した。

2）成果（課題）が生まれた要因

●対象者の思いを大切に聴く

得意なことを聞くだけではなく、地域や住民のために何かしたいと思っている人なのか、ビジネスとして考えている人なのか等、インタビュー対象者の思いも大切にした。

マップという見える化の形にしなかった理由は、多くの住民が、県営住宅で商売をすることは禁止されていることは承知していて、自宅で作ったものを販売することは禁止事項にあたるのではと不安に感じ、公表することに抵抗がある人が大半だったためである。

3）気づきと今後に向けて

チーム内で人材データの管理についての議論を期待したが、特に意見もなく現状ではチームとしてデータ共有をすることは難しいと判断し、当団体が管理することとした。インタビューをした人材に

は「自治区」という、住んでいる地域だから協力したいという思いは希薄で、人材として地域で見えるように活躍してもらうためには、関係づくりがベースにないと困難であろう。

今後、講師やイベントの出展だけではなく、フィールドワークの受け入れや、多文化共生のセミナー講師等、様々な活躍の場があることが期待できる。多様性のある地域として保見団地への訪問者が増えれば、自分のことを語りたい住民や日本人と交流を望んでいる外国人住民の活躍の場は増えるだろう。

子育てサロンの講座では、言葉の問題がないせいか、ブラジル人に講師を依頼することで、参加者が集まりやすいことを実感した。ただし、日本人には言葉の壁ができることになり、双方が参加しやすい講座を考えていく必要がある。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・人材リスト

・「ふれあい祭り」に外国人住民が出店することで、地域色のあるイベントとなり、自治区役員にも喜ばれた。

・ネイル講座講師からは、参加者に向けて「自分はやりたいことに向けて勉強と努力を重ねてきた。実力を知るためにコンクールに出て優勝した。日本に来て工場でずっと働くことは本当に嫌だったので、ネイルを仕事にすることを目指して勉強してきた。誰でも努力すれば可能性はある。みんな頑張りましょう」！とのエールがあった。

人材リスト＊報告書記載について本人の了解を得ていないことから仮名とする

№.	内容	お名前	備考
1	通訳	マウリシオさん	保見在住 35 年 自治区役員 ボランティアで病院通訳をすることもある
2		デビッジさん	教会で炊き出しボランティア サッカー指導者資格有
3		イワタさん	子育てサロンコア人材 移動屋台作成に協力 ユーチューバー、インフルエンサー
4		マリアさん	時間があれば有償で通訳の仕事を受ける　ブラジルでは日本語を教えていた
5		エリキさん	病院等で仕事として通訳をしている DIY が得意、移動屋台作成に協力
6		マリアンさん	日本語指導者　　英語も得意 卵配布に参加
7		レイコさん	イベント等で通訳としてプロジェクトに協力
8	ポルトガル語書籍販売	パウロさん	子ども食堂に協力
9	マクラメ	マユミさん	依頼があれば作成する
10	ネイル	ケイコさん	イタリアの大会で優勝 子育てサロンでの講師
11	ズンバ	アナさん	瀬戸市で教室を開催　子育てサロンで講師
12	プレート作成	ハイメさん	EAS 生徒　メルカリで販売
13	小物作成	アリシアさん	ESS 生徒　メルカリで販売
14	農業	ブルーノさん	ボカシを使った有機農業で野菜を作っている
15	学習	スージーさん	子どもに日本語、ポルトガル語を教えている
16	ケーキやブラジルのスナッ	カルメンさん	パーティー等の注文を受けて販売

17	ク	リリアンさん	注文を受けて販売
18	飴	ケリーさん	オリジナルの飴を作りイベント等で販売
19	アクセサリー	ヘベカさん	オリジナルアクセサリー作成販売
20	ペルー料理	レニーさん	注文を受けて販売
21	タイ式マッサージ健康アドバイス	アリシアさん	浄水の温泉のサロンと出張マッサージ

4-2　アート活動を通して日本人・外国人住民が日常的に交流する状況に近づくことができたか

成果	保見アートプロジェクトが定着し、アートを通して日本人住民と外国人住民が日常的に交流する状況がすすんだ		
アウトカム指標　1	交流の状態		
	初期値	目標値	実績
	保見アートプロジェクト実施により、外国人と日本人との交流が自治区等の関係者に意識され始める	継続的なアートプロジェクトの実施 移動屋台の作成	アートプロジェクトの実施 移動屋台の活用（フリーコーヒーなど） 行政主催によるアートプロジェクト実施
評価方法	アーティストへのヒアリング(2023 年 1 月)、プログラム全体を振り返っての事実確認		

1）確認できた事実・成果

活動場所の制限という課題に対し移動公民館を制作

フリーコーヒー等新たな活動の創出

●多彩なプログラムで保見アートプロジェクトが定着

①2020 年 5 月 18 日　Projecto HOMI こどもしょくどうのうえん看板設置

②2020 年 10 月アートプロジェクトで壁画を描いた 25 棟の壁（以下地球家族）に落書きがされ新聞記事になる。管理について愛知県住宅供給公社、県営自治区と協議、壁画に関してはトルシーダが管理することとなる。アーティストによる修復

④ 2020 年 12 月 1 日　アートプロジェクトについてケーブルテレビで発表

⑤ 2020 年 12 月 12 日　スタンプでマイマスクを作ろう。集会所の庭をクリスマス飾りできれいに
ビンゴ大会（県営集会所）
クリスマスオーナメントを作ろう。多言語読み聞かせ（地球家族）
参加者 50 人（外国人家族）

⑥ 2021 年 3 月 21 日　日本語教室でライブアート　ライブアートとコマのペイント（ＵＲ141 棟と、ＦＯＸマート前）参加者 20 人（日本語学習者小中学生 14 人）
完成した作品はその後スーパーの中に展示

⑦ 2021 年 3 月 27 日　入学を祝う会　給食ナプキンにデコパージュ、保見プロジェクト掲示板設置
カレーふるまい（県営集会所）参加者５５人（外国人親子）

⑧ 2021 年 5 月 9 日　プラゴミをリユース　プラゴミでペットボトルキーパー作成（県営集会所）
参加者 35 人（外国人小中学生）
⑨ 2021 年 6 月 27 日クリエータースマーケットの招待を受け、保見アートプロジェクトの発表（ポートメッセなごや）
⑩ 2021 年 8 月 3 日　畑の野菜の絵を描こう（県営集会所）参加者 16 人（外国人小学生 8 人）
⑪ 2022 年 5 月 4 日、5 日　移動屋台制作（ＵＲ142 棟）参加者 10 名（外国人 3 人、日本人 7 人）
⑫ 2022 年 5 月 8 日　移動公民館を作ろう　移動公民館や屋根部分のペイントとキーホルダー作成
（地球家族）参加者 30 人（外国人住民）
⑬ 2022 年 6 月 18 日　移動屋台を完成させよう！　ドリームキャッチャー作り（県営中公園）
参加者 35 人（外国人の小学生 25 人日本人親子 3 組）
⑭ 2022 年 8 月 1 日　シンポジウム「わたしたちの地域社会における共生を目指して」保見アートプロジェクトの発表
⑮ 2022 年 8 月 20 日　移動屋台でのフリーコーヒー（ＵＲ14 1 棟前）以後月 1 回のペースで実施
日本人、外国人 10 名～15 名
⑯ 2022 年 9 月 4 日　ハウジング＆コミュニティ財団で保見アートプロジェクトと移動屋台について発表
⑰ 2022 年 10 月 23 日　地域の祭り（ふれあい祭り）でライブペイントと移動公民館での絵本配布
（6 区自治区）参加 80 名（外国人住民 9 割、日本人住民 1 割）
⑱ 2023 年 1 月 12 日　愛知県芸術劇場職員研修で保見アートプロジェクト発表
⑲ 2023 年 1 月 17 日、26 日、2 月 4 日　猿投支所主催　ダストボックスペイント（保見中学校）
（保見中学校 1 年生有志 18 名）

●移動公民館活動が誕生

2021 年、建築家がアートプロジェクトに加わった。豊田市の高専で学び、その頃から保見団地に興味があり、エクアドルでまちづくりの経験があるという人材。ゴミの問題を聞きさっそくプラゴミを使ったワークショップを企画した。その後、県営の集会所が使えないという問題と、人が集められないなら、人が集まっているところへ移動していけばいいのではという発想で移動公民館（人がいるところへ人力で移動する公民館。当初は屋台と呼んだ）の企画が動き出した。普段は日本語教室の本棚として使い、必要に応じて出動する屋台である。土台部分を建築家が組み立て、屋根になる部分を壁画作成のアーティストが担当するコラボの元、移動公民館が誕生した。この事業の当初計画になかったが、ハウジング＆コミュニティ財団の助成を受けた。

●アートを使った地域づくりへの波及

22 年 6 月 18 日のアートプロジェクトの視察に訪れた豊田市長から、「アートを使って地域づくりを推奨してはどうか」と行政職員や関係者に働きかけがされた。そして、豊田市役所猿投支所と中学校にアーティストが協力し、23 年 1 月 17 日、26 日、2 月 4 日にゴミ×アートのプロジェクトを行うなど活動の広がりが表れている。

２）成果（課題）が生まれた要因

この事業を実施するきっかけとなった保見アートプロジェクトのワークショップに参加した経験があったり、日常的にアートプロジェクトの作品を目にしたりする住民には、アートプロジェクトは身近なものとなっている。何よりも住民から「きれいにしてくれてありがとう」という声をよく聞く。アーティストと親交がある住民もいる。このように日常の中に溶け込んでいる活動になっていること

が成功の背景にある。また、アート作品のクオリティーの高さも成功の大きな要因になっていると考える。保見アートプロジェクトを実施する際、多くの関係者は「どうせすぐに落書きされる」と冷淡な反応だった。しかし、出来上がった壁画のクオリティーと壁画制作のために団地に通ったアーティストたちが築いた住民との関係の前に、その心配は消えていった。それでも、残念ながら壁画に落書きがされる事件はおきた。警察に被害届を出した県営住宅自治区の対応に対し、「(犯人とも）対話がしたかった」と語ったアーティストの想いは住民に伝わっている。

また、新たなメンバーも加わり、プラごみを使ったエコバックづくりの制作や移動屋台ができたことは大きな成果である。制作した移動屋台を活用して、フリーコーヒーを提供し交流の場を持つことができた。

3）気づきと今後に向けて

「日本人にも外国人にもなかなか受け入れてもらえない」相互理解のきっかけになればとアートプロジェクトを企画したアーティストの当初の悩みだったが、作品は地域で発信し親しまれていく。後述するアート活動に反対した住民でさえ、話し合いをする中で今度は自分が住む高層棟の壁に大きな絵を描いてほしいと言ったほどである。チームで作成した保見団地のビジョンでも、「アートストリート」「文化を学び合う場」として、アートプロジェクトを発展させていきたいという提案がされている。アーティストとは、保見団地そのものが多文化の豊かさが発信できる劇場になるのではと話し合っている。

愛知県芸術劇場職員セミナーでアートプロジェクトの発表の機会を持つなど、他地域波及への期待も高まっている。絵だけではなく、ダンスや演劇など「言語という壁」がある地域だからこそノンバーバルコミュニケーションの可能性を視野に発展させたい。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

2022 年 10 月 23 日、地域の祭り（ふれあい祭り）で久しぶりのライブペイントが行われた。これまでだとアーティストが描く様子を遠巻きに眺め、積極的に参加する人は少なかったが、この日は声を掛けなくても参加する親子がどんどん現れ、みんな思い思いに好きな絵を描き、アーティストのアドバイスをもらっている姿が印象的だった。アーティストたちは「いいね」と言いながら子どもたちが描いた絵にさり気なく手を入れ作品にしていく。自分でやってみる体験が自己肯定感につながると聞くが、大きなキャンパスに自由に絵を描く体験はそれを育むものだと感じた。また、ライブペイントの様子を見て「25 棟も（アーティストが壁画を描いた場所）？」と聞く人がいたり、将来ビジョンのワークショップでは「まだ行ったことはないけど、有名だから知ってる」と言う人がいたり、アートの活動は住民に関心が持たれていることが分かった。

全ての住民の理解を得る難しさを感じた事件もあった。リユース工房設置の過程で、自治区から依頼された場所にアーティストがペイントをしようとした際、一人の住民からアーティストに「住民へ説明がされていない」と、強い反対があった。アーティストにとっては理不尽なクレームの前面に立たされることになり、アーティストリーダーの中島は事情が呑み込めないまま「今まで築いてきた住民との関係が全て壊れた気がした」と語った。その後、アーティストの中には参加を躊躇する声もあったが、話し合いがもたれ、改めて住民との関係づくりを丁寧に進めることとなった。アーティストからは、「(反対した住民は）リユース工房を設置しようとしている〇棟への愛がとても強いから」と相手を慮る意見もあった。全ての住民が納得することは難しいが、外国人であれ、日本人であれ相手の立場に立って考えることが、課題として戻ってきた形になった。

4-3 団地住民と外国人住民が子育て活動を接点として、つながりあう関係を作ることができたか。子ども会に代わる組織の萌芽が表れたか。

成果３	団地住民と外国人住民が子育て活動を接点として、つながりあう関係を作ることができた。子ども会に代わる組織の萌芽が表れた		
アウトカム指標　３	①子ども会にかわる組織ができる ②子育て世代がつながりあう関係		
	初期値	目標値	実績
	①無 ②隣近所のつながりがない	①組織がある ②　隣近所で情報がつながる	①　組織基盤となるグループができ活動した
評価方法	コアメンバーの声		

１）確認できた事実

組織化と外国人・日本人の交流ができることが目指した成果だった。しかし、現実的には、組織化は主体的な活動ができるようになること。日本人との交流は、強くは目指さず日本人の協力が得られることを目指した。

●やりたいことができる成功体験の場を目指す

子ども会に代わる組織として子育て支援グループの立ち上げを目指す活動として、2021 年 7 月 3 日にコアメンバーとコアメンバーに近い人たちを集めて、子育てサロングループ結成のためのワークショップを行った。そこで、子育てしやすい地域づくりに向けて何がしたいかアイディアを出し合った。「もっと子どもたちに日本語や勉強を教える場所がほしい」「ＢＢＱ場がほしい」「みんなで旅行に行きたい」等様々な意見が出されたが、その中から実現できそうなものを「子どものため」「保護者も楽しみながら交流」など目的を分類しながらプログラムを考え実施していくことになった。

外国人に子育てに必要な情報を伝えることを目的とした多文化子育てサロン実施の経験や、団地内での近所づきあいの観点から日本人との交流も目的の一つになると考えていたが、ブラジル人子育て世代にやりたいことがたくさんあり、その実現を後押しした方が主体的な活動になり、組織化につながると判断し、まずはやりたいことを実現する成功体験の場を目指した。

●組織の基盤が生まれる

運営を検討する際、コアメンバーから「PTA のように会長を決めて組織化をしたら」との声もあった。反対に、たくさんの人の声を聴きやりたいことの実現をサポートしていく方が、お互いに知り合う機会になるし安心して子育てができる地域づくりにつながるのではとの意見もあり、議論された。その結果、上下関係のない組織にしていこうとのコンセプトができあがった。

●日本人の協力が得られた

子ども食堂やクリスマス会には料理を一緒に作りたいという日本人のお手伝いがあった。ビンゴの景品の多くは寄付していただいた物を充てた。また、韓国人の教会で活動している皆さんの参加もあった。さらに、トヨタ自動車 EX 会からは、中古ランドセルの寄贈があり新一年生に渡すことができた。このような多くの協力があったことは、外国人主体の子育てサロンの成果と言える。

コロナ感染拡大の懸念から自治区の集会所や広場の使用ができなくなる、依頼したら使えない道具を貸し出された等、足元の自治区の支援が得られなかったことがあり、子ども会に代わる子育てサロンとしてはメンバーのやる気を削ぎ、自治区を通してイベントの周知をする等の協力関係を築く雰囲気は生まれなかった。

２）成果（課題）が生まれた要因

●話し合い・準備・実施を進めるためのサポート

毎回のイベントは、内容についての話し合いから準備、実施までブラジル人保護者により進められ、安定的な参加があった。話しやすい雰囲気を作るためにトルシーダがファシリテーターとなり、参加者の発言を促したが、ポルトガル語という言葉の壁はあり、感情まで理解することは難しいときもあった。ミーティングでいつまでに誰が何をするが決まれば、あとはSNSでやり取りをした。特にリーダー、副リーダーに当たるメンバーとトルシーダでライングループを作り、チラシ作成、facebookでの発信と必要な物を購入する等イベント実施までの準備を行った。託児やイベントの講師を子育てサロンのメンバーからの推薦で人選したことも成功の要因になった。講師打ち合わせはリーダーに依頼したが、リーダーとは、フードパントリーの手伝い等で話す機会が多く、日本語も堪能なことからその都度必要な支援が可能になった。

デコレーションや、衣装づくりが得意なメンバーもいたが、それぞれ仕事もあり「毎回誰がそれ（準備、託児等）をするのか」という議論が繰り返された。一人で請け負うことの不安もあったようで、できれば集まって内職をする感覚で、楽しんで準備ができる余裕があると良かった。資金管理についての経験不足など課題も見えてきた。

３）気づきと今後に向けて

当初は、水鉄砲での水遊び等、どんどんアイディアが出て準備し実行していく様子があったが、コロナ感染拡大懸念によって自治区の協力が得られないと判断した時点から「したいことを地域の協力を得てやってみよう」という雰囲気は消えた。それでもネイルやズンバ教室等、準備の負担が少なく、託児があり保護者が楽しめる行事は人気で、「保見団地の住人に限定する」など、参加者をどのように制限するか、そのための広報はどうしたらいいか等話し合われた。

運営を担うリーダーからは「約束しても来ない」「仕事で話し合いの時間が取れない」等コアメンバーが指示すれば皆が動くことを期待する発言が目立ち、人集めの負担感が大きいことが分かった。リーダーに「継続のために必要なものは何か」と尋ねたところ、「お金と時間」と明確な回答があった。参加はしたいけどボランティアはしたくない人がほとんどで責任をもって運営に関わる人材確保のためには資金が必要なのはどの団体でも同じであろう。この課題を軽減するため、トルシーダの行事とコラボさせるなど、日本人とほどよい距離をとりながら影響しあえるような運営やイベント実施をすることもしていきたい。

ブラジル人住民が組織運営について、ある程度のノウハウを共有したことでプロジェクトとは独立した形で、ブラジル人保護者の有志でハロウィンイベントを実施するなどの成果もあった。日本人との交流促進を目的とした子ども食堂とコラボさせたクリスマス会は、日本人支援者の参加も得やすかった。ネイルやズンバの講師など外国人住民が活躍する機会にもなった。

組織としての形はできつつあるが、一部のメンバーに負担が偏らないように担い手を増やすことと、時間を使った分の謝金の担保が課題である。

４）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

① 2020年7月5日　七夕まつり
② 2021年3月27日　入学を祝う会
③ 2021年7月3日　ワークショップ（県営集会所）
④ 2021年7月25日　水遊び（県営中広場）
⑤ 2021年8月前半　学習支援教室「ほみっこサロン」実施（県営集会所）

⑥ 2021 年 8 月 23 日　うりんこ劇場観劇（招待）
⑦ 2021 年 10 月 9 日　ネイル教室（保見交流館）
⑧ 2021 年 10 月 24 日　ズンバ教室（UR142 棟集会所）
⑨ 2021 年 12 月 3 日　映画撮影（ファミリア）に協力（地球家族）
⑩ 2021 年 12 月～2022 年 3 月　希望者にランドセル配布
トヨタ自動車 EX 会から中古ランドセルの寄付
⑪ 2022 年 2 月 26 日　子ども食堂　ポルトガル語での読み聞かせ（保見交流館）
⑫ 2022 年 3 月 17 日　入学を祝う会としてお弁当教室（保見交流館）
⑬ 2022 年 7 月 3 日　フェスタジェニーナ×七夕（保見交流館）
⑭ 2022 年 7 月～8 月　ブラジル人理学療法士による発達が気になる子ども相談会と療育（全 10 回）
（UR142 棟集会所）
⑮ 2022 年 12 月 10 日　多国籍クリスマス会（保見交流館）
⑯ 2022 年 3 月（予定）　入学を祝う会
＊（他のプログラムとのコラボした行事も有）

●特筆すべき成功例

学習支援の教室にブラジル人理学療法士の参加を仰ぎ、相談会や療育を実施したことがきっかけで発達障害の支援グループが生まれた。子育てサロングループのメンバーから独立した形になったが、今後も機会を見つけて子育てサロンに関わってほしいと願っている。

4 - 4 地住民の生活上の困りごとの把握や見守りの関係を作ることができたか

成果	相談会を開催しなくても、団体の携帯電話に相談の電話がかかってくるようになった		
アウトカム指標　1	外国人住民の高齢化、不安定な労働環境にある等生活困窮に陥りやすい状況だが、行政が実施する相談会に参加が少ない等現状把握ができない。近所づきあいが希薄でどこに誰が住んでいるか分からない匿名性の高い暮らしになっている。		
	初期値	目標値	実績
		日常的にあいさつや話ができる状態。食料に困っている人が助けを求める場がある	毎週金曜日休まず卵配布をおこなった。名前、棟と部屋番号を聞き、独居の確認等につながった。生活困窮者には個別に食料を届けたことで、食料支援の SOS が当団体に入るようになった。福祉総合相談課の協力を得て相談会を実施した。
評価方法	フードパントリー参加者にアンケートを行った。 2023 年 1 月 27 日及び 2 月 3 日　参加した 32 人にアンケートを実施		

1）確認できた事実・成果

●「困っている」の声を出す難しさ

卵の寄付を受け、2020 年 6 月には、地球家族で卵とお米、衣料品の配布をおこなった。フードパントリーとして毎週金曜日朝 7 時からの卵配布を開始した 2020 年 7 月はコロナの影響による時短労働、解雇等で生活困窮に陥った人の支援が全国各地で実施されているタイミングであった。保見プロジェクトでもコロナ給付金の申請サポートをしたが、「生活に困っている声」を直接聞くことはなかった。全国的に支援活動を展開している他団体から、「保見団地に仕事が無くて困っている世帯があるが支援できないか」という連絡を受け、食料を届ける状況であった。食料を届けても「私よりもっと困って

いる人がいるのでは・・・」と遠慮する声もあり、仕事がないことは恥ずかしいことで、生活の場で困っていることを声に出すことの難しさを感じた。

そこで、日常的なつながりの中で、声かけをし、困っているときは「お互い助け合う」関係性が生まれることをフードパントリーの目的として考えるようになった。毎週金曜日朝のフードパントリーは、現在も継続して実施している。冬に鶏が卵を産まなくなる時期があるが、米、フェジジョンといった卵に代わる食料品を配布している。寒い間は参加者も減り 25 人前後、多いときには 60 人余りがフードパントリーに訪れる。

●毎週必ず行うことで、顔見知りが増える

2023 年 1 月～2 月に行ったアンケートでは、多くの人が毎回参加してくれていることがわかった。中には手作りのブラジルスナックを差し入れしてくれる人も出てきた。運営者にとって、あの人とあの人は一緒に来る、足が悪いのに 3 階に住んでいるから大変、最後に来る人は○○さん等、暮らしが垣間見えることがある。また、フードパントリーに来る人から知人への食糧支援を頼まれる関係性も生まれてきた。卵配布はこのプロジェクトの中心的な事業になっただけではなく、近所づきあいのきっかけづくりという効果が生まれた。

卵配布を手伝ったカレンは毎回名前と住所をメモしたことで、どこに誰が住んでいるかを記憶し、この活動が災害時の支援にも生きることが分かった。

●SOS の電話がかかってくるように

2021 年 12 月に、行政と協働し「相談会」を実施した。トヨタ自動車 EX 会の皆さんの協力でフードパントリーを行い、そこでのヒアリングから専門的な支援に繋げる必要がある人に行政による個別相談を勧めた。この頃になると食料支援の依頼の電話もかかってくるようになった。2020 年、21 年はコロナや景気悪化による時短、失業の相談に加え、長時間の重労働でヘルニアなど病気で働けない人が目立った。2022 年になると、規制緩和での入国が増え、来日したばかりだが日本語を勉強する場所がない、食料が必要との電話が急増した。赤い羽根共同募金の申請を行い、約 120 世帯に食料品や文房具を届けた。

2）成果（課題）が生まれた要因

●一方的な支援にならないこと「助け合い」に

一方的な支援に留めない工夫を考えた。ただ食料をもらうだけでは、「助け合い」活動に展開していくことが難しいため、ペットボトルの蓋一つと卵一つと交換することにした。また余っている食料があれば持ってきてほしいとお願いし「お互いさまボックス」と名付けた箱へ寄付してもらい必要としている人に届けるなど、一方的な支援にしない工夫をした（ただし、コロナ感染拡大の不安から自治区集会所前が使えなくなったことでエコキャップ収集活動は中止した）。

●日常に根づいた場になった

職場で配られたパンや、手作りのブラジルスナックを届けてくれる人も現れた。卵以外の食材の寄付も得られるようになり、交流会でのふるまいに活用したことで、フードパントリーの活動を知る人が増加した。

通学する小中学生、ブラジル人学校生、通勤する人たちに「おはよう、いってらっしゃい」と声かけする朝の風景が金曜日の定番となったことも、活動の周知につながったと思われる。

3）気づきと今後に向けて

継続することで生まれたつながりを大切に育てていく。卵配布に訪れる人はほとんどが高齢者である。坂や階段が多い団地内を歩いてくることは大変だが、アンケート結果からも多くの人が毎回参加しており、「継続は力なり」を実感しているところである。卵の寄付がいつまであるか分からないが、だれも孤立させない地域づくりに寄与するべく、この活動をお互い様の気持ちで困ったときには助け合える人の輪として広げていくことを目指したい。

4）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

「この活動は生活の助けになっている」

「歩いていたら見かけたので、何をやっているのかと寄ったのがきっかけ、それからずっと来てる」

「金曜日になると何となく今日も行こうかと思う」等、生活の一部になっていることが分かる。

また、「金属を集める仕事をしているよ、話し相手はいっぱいいる。スペイン語を話したい日本人はたくさんいるからね」と語った石川さん（仮名）は、いつもスーパーの階段を上った場所で、朝からビールを飲んでいる積極的には近づきたくない存在だ。フードパントリーに来なかったら名前も分からず、話す機会もなかったかも知れない。石川さんにもトルシーダが何をしているのかわかってもらえて、 bienvenido と受け入れる場所があれば、壁は低くなることを実感した。

アンケート結果

1	**卵の配布を何でしりましたか**
	① 回覧板 2 人　②掲示 6 人　③通りかかりに見た 3 人　④知人に誘われた 19 人
2	**どのくらいの頻度できていますか**
	① ほぼ毎回 24 人　②月に 2 回程度 3 人　③月に 1 回程度 3 人　④ときどき 2 人
3	**卵配布に行こう！と思う主な理由はなんですか？（複数回答可）**
	① 卵等の食糧がもらえる 29 人　②挨拶やおしゃべりができる 9 人　③情報がもらえる 6 人 ④出かける機会になる 5 人　⑤フリーコーヒー7 人
4	**卵配布の場所はどこが一番よかったですか**
	① 県営集会所 18 人　②池の前の集会所 1 人　③ケアセンター保見の前 13 人

卵と一緒に情報も届ける

毎週金曜日 AM7:00 フードパントリー

5 特筆すべき成果
～予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等～

5-1　民生委員以外の形での相談活動の存在

チーム構成団体のトルシーダと保見プロジェクトが集会所で、毎週のフードパントリー・子ども食堂の活動を展開した。そこでは、コロナ予防接種の事前診断部分の書き方など、ちょっとした相談が寄せられ、団地で生まれ育った若い外国人が対応している様子を見られた。また、県営保見自治区では民生委員がいないが、自主的に相談役になっている住民リーダー的な人がいることも見えてきて、ゴミ屋敷状態になっている方への支援など、そこからの情報提供で対応した事例も生まれた。

相談会等この事業での相談会活動が動き出すと、転居や離婚等で収入がなくなり不安だという声や、ヤングケアラー等専門的な支援につなげる必要があるケースと、ランドセルや制服の準備ができないといったネットワークがあれば解決できそうな困りごとまで、様々な問題が持ち込まれ対応に追われるときもあった。多くは簡単には解決しないが、当事者からは「市役所では米がもらえなかったのに、良かった」という声や「ランドセルかわいい！本当に本当にありがとう」という声もあり、移動する人が多いこの地域では、「相談できる人や場があること」が顔の見える関係づくりに欠かせないものであることを実感している。自治区や民生委員制度とは別の形で、ちょっとした相談できる住民を増やし、そこと自治区がつながる重要性が確認できた。

5-2　おしゃべりや小さなお手伝いを通した生活課題の発見

もう一つの予測しなかった展開は、日本語教室では接点のなかった日本人住民、特に高齢者との接点ができたことである。前自治区長が九州の炭鉱閉山を機に転居してきたこと等、団地の歴史そのままのライフヒストリーを聞いた。日本語教室に参加する子どもたちが、保見団地の課題を知るために、保見団地の外国人口や集住の課題について調べる時間を持った。粗大ゴミの問題についてもレクチャーを受け、自治区、豊田市の清掃課による撤去を見学したりした。

保見プロジェクトとの振り返りにおいて、高齢者サロンから派生して、出前型のお手伝いをする活動が生まれているという話を聞くことができた。最初から「相談対応」を全面に置くのではなく、ちょっとしたお手伝い等を行いながら、信頼できる関係をつくり、気兼ねないおしゃべりの中で何気なく出た困りごとが発見できたら対応する、といった相談機能の作り方もあることがわかった。

南米の人たちは本国では近所づきあいもあり困ったときには助け合うのは当たり前と考えている分、外国人の子どもや若者は日本人高齢者と普通に接する様子があった。外国人高齢者の中にはポルトガル語も日本語も読み書きが苦手な人がいるが、お手伝いの若者は、状況を察しさり気なく代筆するし、日本人のおばあちゃんを「かわいい」と笑顔で接する。小さなつながりがあれば、世代の違いも文化の壁も少しずつ超えていける手応えがあった。

ブラジル人学校生もフードパントリーのお手伝い

行政と協働して行った相談会

E¥

6．協働・連携による課題解決の体制の充実

6-1　チーム内の協働・連携

1）チーム内で協力した内容

B0：愛知県県営住宅自治会連絡協議会、　B１：県営保見自治区、　B３：保見プロジェクト（中京大）
B４：外国人との共生を考える会

（1）人材 MAP（データ）作成					
協力活動の項目	B0	B1	B3	B4	協力した内容
人材発掘	●	●	●	●	人材の情報について共有
内容的な連携	●	●	●	●	インタビュー対象者の見える化（機会提供）
作業面の手伝い	●	●	●	●	通訳の手配　場所の提供　インタビュー対象者への連絡
その他	●	●			地域行事との調整発掘を
協力による効果　日本語教室学習者とのネットワーク、保見で活動する NPO や教会のグループ、イベント等に参加する皆さんのご近所情報を元に人材についての情報収集を行い、インタビューに繋げた。インタビューだけではなく、屋台制作を手伝ってほしい、イベントで軽食を販売してほしい等、事業とのかかわりを作ることを工夫した。将来ビジョンのワークショップを日本語教室で実施して意見を聞くなどの相乗効果も生まれた。					

（2）アートプロジェクト					
協力活動の項目	B0	B1	B3	B4	協力した内容
広報	●	●	●		イベントのチラシ　回覧場、掲示板の活用　放送による案内
内容的な連携	●				イベント内容について相談と他団体とのコーディネート
作業面の手伝い	●		●	●	荷物の運搬　　アーティストの手伝い　会場案内
その他	●	●			保見団地の他の自治区との連絡調整、会議への出席
協力による効果　この事業の前段階となる保見アートプロジェクトの内容が継続でき、小学校、中学校、住民との交流が途切れなかったことでの効果は大きい。保見アートプロジェクトでクラファンを実施したことによる周知の広がり。豊田市国際まちづくり推進課のチーム会議に出席等による行政との情報共有が、市長視察とその後の猿投支所と保見中によるダストボックスに絵を描くワークショップにつながったと考えている。2 月 18 日には披露目会がある。					

（3）子育てサロン					
協力活動の項目	B0	B1	B3	B4	協力した内容
広報	●	●	●		回覧板、掲示板の活用
内容的な連携	●				いろいろなサポート団体の紹介
作業面の手伝い	●	●			会場の手配、道具の貸し出し
その他	●	●			小学校、中学校、行政への情報提供

協力による効果　当初、県営住宅の集会所で、イベントや準備ができた間は自治区の役員や高齢者と、子育てサロンの参加者との顔の見える関係づくりが期待できた。場を共有することで「どこに住んでいる誰」ということが分かると、会話も始まる。子育てサロンのメンバーから、直接自治区役員に会場使用について相談することもあった。この関係が継続できなかったことは残念だが、地域で「場」を創ることの重要性が認識された。

（4）フードパントリー					
協力活動の項目	**B0**	**B1**	**B3**	**B4**	**協力した内容**
広報	●	●	●		回覧板、掲示板での案内　町内会での放送
内容的な連携	●		●		フードパントリーでの子ども食堂の実施
作業面の手伝い	●		●		フードパントリーの準備と撤収　食材の配達
その他	●	●	●	●	チーム会係者会議の設置と出席
協力による効果　自治区には、住宅に関する相談は持ち込まれるが、民生委員不在で、生活に関する様々な相談に対応する機能がない。最初に困窮者支援ではなく、コロナ給付金の申請の支援をきっかけにフードパントリーを始めたことで、暮らしのお手伝いをする事業として認知され、住民の目があっても来易いフードパントリーとなった。フードパントリーを実施で、福祉関係のつながりができ事業の幅が広がった。児童相談所、福祉課、社会福祉協議会との連携で、情報共有が可能になり、生活保護につながったケースもあった。					

2）自団体の貢献と体制整備

（1）自団体がチーム対して行った協力内容、その効果と評価

・外国人住民とのファシリテーター、外国人住民に広報し、参加を促す。
・外国人住民の状況を聞き、コロナ給付金申請のための支援等、事業を計画する。
・小中学校やトヨタ自動車ボランティアグループとのコーディネート
・アーティストへの連絡調整

チームに外国人主体となる団体がないため、日本語教室等で外国人住民と身近でフラットな関係性にある当団体が外国人住民への働きかけを担った。保見団地で活動し始めて 25 年の積み重ねがあり 2 世代、3 世代の付き合いの中で外国人住民の率直な意見も聞くことができた。

また、寄付やボランティア参加希望はすべて受け入れ、当初予定になかった毎週金曜日朝の卵等配布のフードパントリーはこの事業の中心的役割を果たした。

（2）自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての成果と評価

フードパントリーや子ども食堂の活動は、食材の引き取りから配布まで手間がかかり、日本語教室を行いながら、人手と時間を工面することに苦労したが、日本語教室の卒業生をサポートに加え実施体制を整えた。

相談業務は日本語教室の中でも経験しており、それなりのノウハウはあるが、福祉関係の相談は制度や仕組みを知らないと、関わることが難しい。そこで、相談会に行政職員に参加してもらう等つなげる工夫をした。福祉課、児童相談所、社会福祉協議会と情報交換する機会が増えたこと、行政サイドも保見団地の個別の問題に手を出しにくいという課題があるところに、この事業が実施され、双方にメリットがあったといえる。自団体にとってはネットワークが強化されたこと、日本語教室以外で

の地域での活動場所ができたことは成果である。

6-2　支援対象者・参加者の参加促進、関係の形成

（1）人材 MAP（データ）作成			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
インタビューを受けた人、人材発掘に協力した人 50 人	コミュニティビジネスの講座に参加　3 人	インタビューを受けた人 21 人	イベント等への出店 事業の手伝い 関係者に紹介　9 人

（2）アートプロジェクト			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
住民の 7 割	ライブアートやワークショップに参加 100 人	準備や制作のお手伝い 10 人	企画の持ち込み　2 人

変化・成果

当初は県営住宅の通路という人目につかないところに絵を描いても仕方がないと相手にされないこともあったが、アーティストが絵を描くことが目的ではなく、多文化共生を目指した活動ということが理解され、発表や見学の依頼が増えるなどじわじわと周知されている。
市長の視察とその後の意見交換は行政職員が保見団地に関わるきっかけとなった。

変化・成果（課題）が生まれた要因、評価

単年度のプログラムにならず継続できたこと。アートとしてのクオリティーがあること。地域がきれいになることは誰にでも喜ばれることで、アートプロジェクトの活動は住民に受け入れられていると評価できる。

（3）子育てサロン			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
150 人	70 人	30 人	10 人

変化・成果

外国人保護者のやりたいことを尊重するサポートをした。その結果、チラシを作って facebook で発信したり、子どもが喜ぶプログラムを用意したりと主体的にイベントが実施できる体制ができた。
しかし、継続のための基盤づくりまでは難しく、今後の課題である

変化・成果（課題）が生まれた要因、評価

ネイル教室やフェスタジェニーナ（ブラジルの祭り）等、地縁組織である子ども会の枠組みの中ではできないことが実現し、そのための予算があることが主体的な動きの大きな要因になった。
Facebook での発信を趣味のようにしているメンバーもいて、負担のない役割分担が可能かどうかも大切な要因になる。また、中心的役割を担うことになったポルトガル語と日本語ができるバイリンガルのメンバーの存在も大きい

（4）フードパントリー			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加

聞いている、通りかかる人、野菜を寄付してくれる人等　300 人	100 人	荷物運び、差し入れ ３０人	学生ボランティア 30 人

変化・成果

当初計画になかった活動であり、毎週金曜日に途切れず開催したことの成果は大きい。日本人、外国人を問わず、高齢者との関係づくりができた。実施場所を巡って県営だけではなく UR 関係者の協力を得ることができた。

変化・成果（課題）が生まれた要因、評価

卵の寄付があったことと、寄付につながる当団体のネットワークがあったこと、それを地域づくりに生かす工夫をしたことが、実施できた要因と考えている。日常的に住民と関わる場所ができたことで、生活相談や困窮者からの連絡が入るようになり、フードパントリーの場にも、相談が持ち込まれることも珍しくない。困ったときに声をあげられることを目指しているが、その状況はうまれつつあると評価している

6-3　課題解決に取り組む協力関係の変化

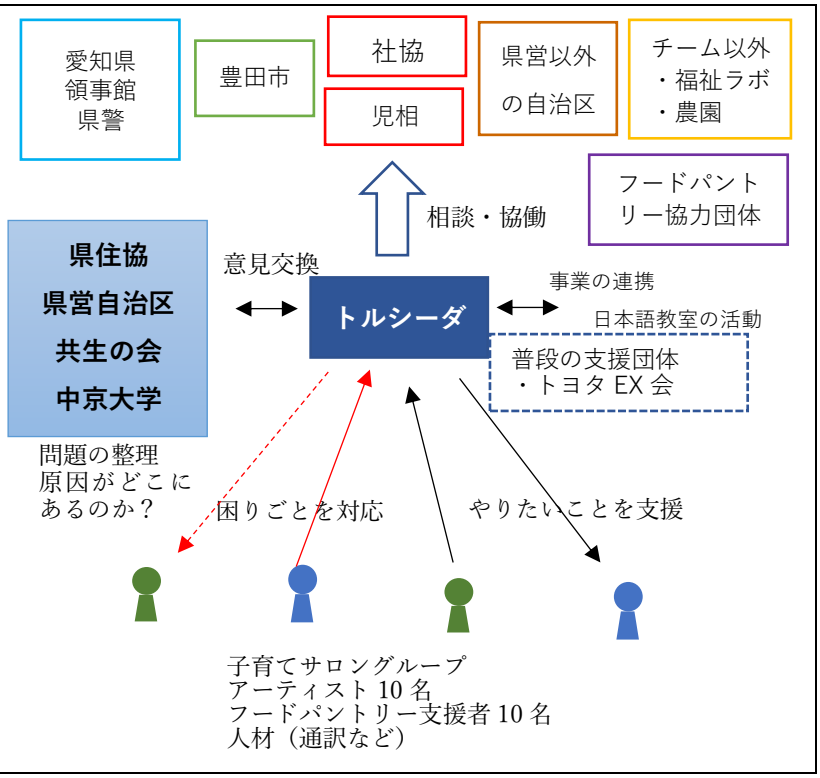
1）協力関係構築の実績

本事業前の関係

外国人住民は、困ったことがあっても、言葉の問題等から声を上げにくく、状況が見えないことが多い。日本語教室に課題が持ち込まれても、福祉の制度などが分からず、支援につなげることができない。
いろいろな趣味を持っていたり、能力に長けている住民がいるが、日本人からは見えない存在になっている。

事業を通してできた関係

地縁組織である自治区の活動に参加しない人たちでも、チームの行事に参加したり、お手伝いをしたりする関係ができた。
保見団地住民に関わるチーム以外のグループ等とも関係ができ、福祉イノベーションラボ（B 型事業所）に人材を紹介したり、保見わくわくの農園の立ち上げに参加する等、新たな関係も生まれた。
トヨタ自動車 EX 会（ボランティアグループ）がふれあい祭りのお手伝いをするなど、普段トルシーダが支援してもらっているグループや人たちに、地域参加の機会を提供することもできた。



事業を通してできた関係			
関係者会議を通して行政や企業との関係ができた。 事業実施を通して、福祉関係の部署や保見団地の県営以外の自治区、団体との関係ができた	1	愛知県県営住宅管理室	管理面での連携・助言
	2	愛知県多文化共生推進室	団地内の多文化共生への協力・助言
	3	在名古屋ブラジル総領事館	団地内のブラジル人の状況の共有
	4	愛知県警察本部・豊田警察署	団地の安全・安心に向けての取組
	5	豊田市役所・猿投支所	アートプロジェクトの実施
	6	豊田市社会福祉協議会	福祉面でのサポート
	7	豊田市役所福祉課	相談会への参加
	8	豊田加茂児童相談所	個別サポートの相談
	9	保見ケ丘６区自治区	花植え活動、祭りの参加、移動公民館活動場所について助言
	10	トヨタ自動車ボランティアセンター	フードパントリー食料支援
	11	ケアセンター保見	フードパントリー場所提供
	12	前原農園	フードパントリー卵の提供
	13	まことファーム	野菜の提供
	14	伊保小学校	野菜の提供

２）協力関係を構築する上で行った工夫、評価

児童相談所や、福祉総合相談課の業務内容を知るために、勉強会を開催した。それぞれ担当者に来ていただき、支援の内容や体制について話を伺った。通訳さんが入ることも多いので、通訳人材にも勉強会の参加を呼び掛けた。

おたがいさま会議とよたに参加し、福祉事業についての報告を聞き、保見地区で活動するグループと連絡をとりあった。社会福祉協議会が実施する「これからの保見を考える会」に出席し、情報交換をした。学校、教育委員会とも連絡を取り合い、必要なサポートに繋げた。

保見団地に住む外国人の８割はブラジル人だが、定住化している現在も移民政策はなく、日本語学習や就労支援の機会に恵まれず、無年金者など高齢者の問題もあること、この事業は外国人に直接支援が届く活動であり、多様性の地域づくりを目指していることを丁寧に説明し協力を仰いだ

将来ビジョンを話し合うワークショップ

トヨタ自動車 EX 会から寄付されたランドセル

７．結論、今後の展望、教訓

７-１　結論：中長期アウトカムに対する本事業の妥当性

日本人住民と外国人住民が地域づくりについて話し合う関係性ができる。また外国人住民が主体的に活躍できる仕組みや環境がある。			
事業実施プロセス	★★★★★	事業成果の達成度	★★★★☆

★★★★★　想定した水準以上にある　　★★★★　想定した水準にある　★★★　想定した水準にあるが、一部改善点が必要
★★　想定した水準に達するのに改善が必要　　★多くの改善の余地がある

●上記のように結論を出した理由

子育てサロンでのワークショップ、人材マップ作製のためのインタビュー、将来ビジョンのためのワークショップ等で、外国人住民の地域に対する意識を聞くことができた。また、それらの意見を将来ビジョンに生かすことができた。

フードパントリー、子育てサロンは外国人の主体的関わりなしにはできなかった。3 年ぶりに開催したふれあい祭りに出店したキッチンカーは全て外国人オーナーで、保見団地の地域色が表れていることを日本人主催者も歓迎した。地域で活躍したり貢献したりする機会があれば人材がいることは明らかになった。

かつてゴミ団地と言われ、ファベイラ（スラム）と呼ばれるので保見団地から出たいという声さえあった団地だが、ワークショップ等で話を聞いた外国人住民は、きれいで静かな住みやすい環境があること、ポルトガル語が通じて便利なこと等、皆地域への愛着を口にした。これらの意見を将来ビジョンに反映させ、自治区に伝えるところまではできたが、問題を抱える自治区と外国人住民が問題解決について直接話し合う機会にまでは至らなかったことで上記の結論とした。

７-２　今後の取り組み

中京大学の保見プロジェクト、県営自治区と共に保見団地センターの活動に参加し、フードパントリー、アートプロジェクトの活動を継続していく。団体として相談体制を強化するために勉強会や通訳養成講座を実施する予定である。いろいろない人が、ご近所づきあいの感覚で、気軽に集まり、交流できる場として「地域食堂」の実施を計画している。エスニック料理を食べてみたり、スーパーにあるブラジルコーヒーを飲んでみる等、食を通してお互いの文化を知る機会を作る予定。日本で育つ外国人の子どもに対しても文化の継承が必要になっているので、母国のことを知る機会として提供したい。引き続き多文化が楽しめる地域づくりを目指していく予定である。

相談事業、フードパントリー、地域食堂については赤い羽根共同募金を活用する。

７-３　事業から得た知見、類似する課題に取り組む団体等に役立つ教訓

フードパントリーを手伝った外国人の若者から、「ルールを分かるように伝える努力をしないで、いきなり規則違反だと怒鳴る日本人を目の当たりにして関わりたくないと思った」との声があった。押し付けられたら逃げていく本音だと思うが、このプロジェクトの中でも度々そのような場面に出くわした。心構えのなかったところに外国人との共生を強いられ、被害者意識のある住民もいるかと思う

し全ての住民が満足できる活動はできない。だからこそ、日本人の中にも、外国人の中にも多様性がある（だからこその顔の見える関係づくりなのではないかと思う）ことを意識しつつ、双方が上下のない同じ立場に立つ前提を整えることの重要性を感じる。

この事業を通し日本語教室を地域に開いていくことで、活動の幅が広がり地域のハブ的な役割を担う場所になることを実感している。日本語を学ぶだけではなく、地域の課題を共に考え発信することもできるし、日本語を学ばない人も集う多文化共生の拠点としての場所であることを体験している。

最後になったが、トルシーダが目指す方向に走れるようまさに伴走支援をいただいた資金分配団体に感謝申し上げます。

8．資料等

①移民政策学会編　2022 年 5 月刊行　移民政策研究　第 14 号（2022 年）

報告　コロナ禍における外国人集住地域での支援現場からの報告―支援者の立場から見る共生の課題と困難

②　愛知県芸術劇場職員セミナー資料（2023 年 1 月 18 日）

劇場職員 2023「アーティスチと考える多文化共生」保見団地県営 25 棟壁からの発信

ふれあい祭りで

アートプロジェクト×移動屋台×絵本のプレゼント×外国人住民の出店×EX 会お手伝い